

国有株及び政府系取締役が銀行の収益性に与えた影響

一橋大学 郎靈

近年、国有銀行の株式会社化をきっかけとして、中国における金融改革が加速した。株主総会、取締役会、監査役会が設置され、銀行全体のパフォーマンスを向上した。国有株及び政府系取締役の間に、通常の利益相反ではなくより特殊な関係がある。国有株支配銀行においては、取締役の社会・政治に関連する経営行動、例えば、国有企業への貸出などを、株主に容認・許可してもらう可能性が高い。

本稿では、2004-2013年33銀行を分析対象として、国有株比率及び政府系取締役は資産収益率及び資本収益率に与える影響を推定して、下記の仮説を検証した。「銀行代表取締役が政府系である場合、国有株が高い銀行の収益率が低い」。

貢献として、既存研究に基づき、株主会社化以後銀行における国有株及び政府系取締役がもたらしたエージェンシー問題を考察して、収益率に与える影響でこの問題を検証するものである。

検証の結果として、資産収益率に与える影響は仮説を支持している。政府系代表取締役の場合、国有株比率が高ければ高いほど、資産収益率が顕著に低くなる。資本収益率の結果には、有意ではないが、結果同じの結果が検出される。結果により、部分的な私有化による銀行パフォーマンスの改善があるが、国有株及び政府系取締役がもたらした負の影響は存在している。

銀行の収益性を向上させるために、株主あるいは取締役と政府への関係を弱める必要がある。社会利益説と政治利益説により、経済成長初期に国有銀行は有益な役割を果たしているが、経済高成長の段階において、資源配分の歪みを引き起こす。結果は理論と一致する。国有株主と政府系取締役のコンビが銀行における「最悪」なコンビである証拠を本稿で示した。中国の金融改革の立案者にとって、株式会社制の銀行ガバナンスが機能を果たすため、国有株主の役割を考えなおす必要がある。

キーワード：国有株、政府系取締役、銀行パフォーマンス